

芥川だより

発行日 * 2022年1月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

身近にある別世界



義母を見送って2週間後、私はハローワークを独り尋ねた。受付で70歳でも働ける仕事なら無条件で働きたい、と申し出ると14番の窓口を紹介され「あなたは背が高いし目立つから警備員でいいじゃない、すぐに電話して明日面接の予約を取ったから行きなさいよ」と言われ翌日に面談に行くと即決で採用され3日間の講習の日時が決まり、以後日曜日以外はフルタイムで働くようになった。

工事に伴う片側通行の交通誘導が主な仕事なのだが、日々場所は変わるし人も変わる。8時から17時ぐらいが平均的だが日によって早く終わる時もある。私は新人なので毎日、先輩社員から怒られてばかりなのだが、妙に楽しくストレスが全くなく寝つきも良い。

ずいぶん昔、土木会社で働く後輩に、「わしは年を取ったら最後は土木作業員で泥まみれであくせくしながら死んでいきたい」と言っていた。機会あるごとに死に際のことを度々言ったり書いたりしているが、死ぬときは畳やベッドの上では死にたくない。安閑とした環境よりもあくせくもがきながらの野垂れ死に憧れるのである。

印象的だった先輩諸氏の死模様を見聞きするに、私の叔母で貧しかった「きみちゃん」の栄養失調による飢餓死ほど強烈なインパクトを私に与えたものはない。きみちゃんは生前、私に「金がなくなれば、10日も飲み食いしなかったら死ぬわ、心配せんでもよい」と言ってケロッとしていた。その言葉を聞いた時に、何ともいえない安心感を得た。えらい人の説教や書物よりも真実だと直感した。そんな影響もあるのか、今の仕事はこれまで経験してきたどの仕事よりも私に適した仕事だと思える。昨日、一緒に働いた同僚は80歳で元気はつらつ。訳を聞くと、警備員はアルバイト、本業は漫才師の現役で13キロのアコーディオンを担ぐためには体力・気力が要るから6年前からアルバイトをしている、もう歳など考えない事だとやる気満々。身近に知らなかった別世界が待っていた。

死をめぐるあれやこれ(86)

石川 吾郎

書適(自由な境地を記す) 陸游

老翁垂七十

七十にもなろうというのに

其實似童兒

まるでこども

山果啼呼覓

山の木の実を見れば泣いてほしがる

鄉讎喜笑隨

練り歩く行列をみれば

嬉しがってついて行く

群嬉累瓦塔

子供にまじって瓦で塔をつくって遊ぶ

獨立照盆池

池の端で一人姿を映してみることもある

更挾殘書讀

また古本を小脇に抱えて読みふける…

渾如上學時

まるで寺子屋に上がった子供のよう

これは南宋の大詩人・陸游(放翁、一一二五から一二〇九)の詩です。七十歳ごろの作と思われるまです。この詩の人物は子供に返ったような姿ですが、新鮮な好奇心と勉学への意欲をみせてさわやかです。七十の声を聞いた我が身に引き比べて、見習いたいものです。◆当時は中国の北半を異民族の

金によって占領され、南宋は金に莫大な貢ぎ物を送り、かろうじて地位を保全する屈辱的な境遇に甘んじていましたが、彼は生涯失地回復を叫ぶ愛国詩人でした。当然のごとく願いは叶わず失意のうちに亡くなっています。◆我が子に残した彼の最後の詩には国の統一がなしとげられたなら、自分の墓前に必ず報告してくれと、書き残したのでした。この状況、形は違うものの現代のどこかの国に似ている気がするの私の気のせいでしょうか。

素老人☆よもだ帳 (94)

坂本 一光

◆花、色、信じる、思いやり、小鳥、音楽、詩、愛する心

友人からの古いハガキが出てきた。ハガキの通信面には、表題に掲げた言葉が散りばめられた詩があった。ハガキは、『ひまわりや』が一九七〇年に制作したもの。詩(か、どうかは分からないが)の最後には中原淳一の名が記されている。表題はない。

『もしこの世の中に、風にゆれる『花』がなかったら、人の心はもともっと、荒んでいたかもしれない。

もしこの世の中に『色』がなかったら、人々の人生観まで変わっていたかもしれない。

もしこの世の中に『信じる』ことがなかったら、一日として安心してはいられない。

もしこの世の中に『思いやり』がなかったら、淋しくて、とても生きてはいられない。

もしこの世の中に『小鳥』が歌わなかったら、人は微笑むことを知らなかったかもしれない。

もしこの世の中に『音楽』がなかったら、このけわしい現実から逃れられる時間がなかっただろう。

もしこの世の中に『詩』がなかったら、人は美しい言葉も知らないまま死んでゆく。

もしこの世の中に『愛する心』がなかったら、人間はだれもが孤独です。

中原淳一

中原淳一という人を、私は知らなかった。氏は一九一三年(大正二年)香川県に生まれ、一九八三年(昭和五十八年)七十歳で亡くなった。氏のホームページには、以下のように「中原淳一の紹介」記事がある。
(<https://www.jyunichi-nakahara.com/profile>)

『昭和初期、少女雑誌「少女の友」の人氣画家として一世を風靡。

戦後一年目の一九四六年、独自の女性誌「それいゆ」を創刊、続いて「ひまわり」「ジュニアそれいゆ」などを発刊し、夢を忘れがちな時代の中で女性達に暮しもフアッションも心も「美しくあれ」と幸せに生きる道筋を示してカリスマ的な憧れの存在となった。

活躍の場は雑誌にとどまらず、日本のフアッション、イラストレーション、ヘアメイク、ドールアート、インテリアなど幅広い分野で時代をリードし、先駆的な存在となる。そのセンスとメッセージは現代を生きる人たちの心を捉え、新たな人気を呼んでいる。

妻は、宝塚歌劇の創世記を担った男役トップスターで、戦後映画・テレビで活躍した葦原邦子』

ハガキの文を読みながら思った。この世界には『花』も『色』も『信じる』も、そして『思いやり』も『小鳥』も『音楽』も、『詩』も『愛する心』もあるのに、この文の半世紀後の今日、この国はなぜこんなに荒み、淋しくて、なぜこんなに不安で孤独なのか。それとこれとは違くと分かっているが、『美しい国』の政治家は『詩』など読まず、美しい言葉を知らぬまま得意気に意味のない言葉をしゃべり、それで政治をしていると思込んでいることの結果でもあるだろうと思った。

買っただけで読んでもいなかった『漢詩七五訳に遊ぶ「サヨナラ」ダケガ人生力』(松下緑、集英社、二〇〇三年)という本がふと目に留まった。『サヨナラ』ダケガ人生ダ』と漢詩を訳したのは井伏鱒二で、井伏を小説の師とした太宰治の絶筆『グッド・バイ』で広く知られた。

勘 酒 于武陵(うぶりょう)

勸君金屈臣

滿酌不須辞

花發多風雨

人生足別離

君に勸む 金屈臣(きんくつし)

滿酌 辞するを須いず(もちいず)

花発けば(ひらけば) 風雨多し

人生 別離足る

芥川だより一八〇号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 86	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 94	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 44	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 50	下村嘉明	5
新型コロナウィルス愚考(21)	明石幸次郎	6
オクラの山たより 64	因了生	7
隠された歴史 39	満田正賢	10
マルクスから学ぶ(11)	成瀬和之	11
俳句	土田裕	12
	影山武司	12
編集後記	S K生	12
ふみの道草 43	山椒魚	13

コノサカヅキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトヘモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

しかし、この本は『「サヨナラ」ダケガ人生力』と問い、「漢詩七五詠に遊ぶ」。こんな具合だ。

洛中訪袁拾遺不遇 孟浩然

洛陽訪才子

江嶺作流人

聞説梅花早

何如此地春

洛中に袁拾遺を訪ねしも遇わず

洛陽に才子を訪えば

江嶺に流人と作れり(なれり)

聞くならく梅花早しと

此の地の春と如何ぞ

東京本社ヲ訪ネレバ

東京本社ヲ訪ネレバ

君ハ辺地ニ左遷トカ

御地ハ梅ノ花ザカリ

春ノ思イハ如何バカリ

その中に、周南の祝婚歌「桃夭」(とう

よう)があった。孔子(紀元前五五―前四七九)が殷の末期から春秋時代半ばまでの詩三百を編纂したという『詩経』に収められた歌である。「夭夭」(ようよう)は若く美しいさま、「灼灼」(しゃくしゃく)は花が盛んに咲くさま、「蕢蕢」(ふん)は木の実のふくらむさま、「蓁蓁」(しんしん)は葉の茂りあうさまをいう。「室家」「家室」「家人」は一族を言いかえたもの。また「帰」には「とつぐ」という訓み方があるという。古来中国では、桃に厄を封ずる霊的な力があるとされ、祝い事には桃をかたどった絵や菓子を供える風習があるとのこと。

桃夭

桃之夭夭	桃之夭夭	桃之夭夭
灼灼其花	有蕢其実	其葉蓁蓁
之子于歸	之子于歸	之子于歸
宜其室家	宜其家室	宜其家人

桃の夭夭たる

灼灼たる其の花

之子于(こ)に帰(とつ)ぐ

其の室家に宜しからん

桃の夭夭たる

有(また)蕢たり其の実

之子于に帰ぐ

其の家室に宜しからん

桃の夭夭たる
其の葉蓁蓁たり
之子于に帰ぐ
其の家人に宜しからん

桃ハイキイキ

ソノ実ハ円(ツブ)ラ

桃ハノビノビ

ソノ花サカル

コノ娘(コ)嫁ゲバ

家内繁盛

桃ハイキイキ

ソノ実ハ円ラ

コノ娘娶レバ

子孫繁栄

桃ハフサフサ

ソノ葉ハ繁ル

コノ娘貴エバ

主人安泰

ああ正に、

桃熟れて命は水の美しさ

ではないか。

(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)

「哲学命い」の時事放談(44) 祖蔵 哲

「22年 時事哲学語り事始め」二つの
コモン」

西暦2020年代がCovid19のパンデミックで始まったのは象徴的であった。そして今年はそれからすでに二年経過。2022年を迎え依然としてパンデミックは収束せず、その第6波は再び世界に拡散しつつある。このパンデミックは何をメタファーしているかといえば、それは『終わり』である。そしてこの繰り返しは『もう終わっている』ということのダメ押しである。何が終わったのか。それはかつて『ポストモダン』と言われた産業革命以来の『近代体制』であったが、今終わっているのは『現代体制』である。すべてが終わった。『後の祭り』である。「コロナ・パンデミック」はその隠喩である。

(1)「時事放談」パンデミック以後のテーマを振り返る

2020年の年初一月号のタイトルは『不安とリスクの哲学』であった。それ以後『ポスト・コロナ』『インフォデミック陰謀論』『不条理』『人間とウイルス』『分配と公正』と続く。そこには人間の生存が「人間世界内の共存」から「自然を含む地球規模での共存」の問題へと

テーマが拡大しているのが読み取れる。一方で昨年度は、そのようなパンデミック禍で人間は今まで通りの生き方ができるのか、が問われた年でもあった。すでにその平和の祭典としての役割を終えている「後の祭り」としての象徴はテーマ『オリンピックとは何か』で、そして政治体制としての象徴はテーマ『民主主義とは』として哲学してきた。さらに規制、自粛の下でのテーマは『自由とは何か』であった。年末号は『新しい資本主義』で締めくくった。これら「オリンピック」「民主主義」「自由」「資本主義」も既に「終わっているもの」ということを示唆している。

こうして過去2年間のタイトルの改め整理してみると、今まで「当たり前」「当然」と思ってきた数々の『コモン・センス(常識)』が根底から覆され始めてきている。さて、今年はどのような課題が提出されるのか。

(2) 今年の時事テーマから

今年の国際時事日程にあげられる主なテーマがまず「選挙」である。3月に韓国大統領選挙が行われる。日本から見た争点は現在の反日政権が引き継がれるのかどうかである。その日本では夏頃に参院選が予定されている。相変わらず政権与党の失策は続き「政治と金」の政治不信は増大する一方であるが、若者を中心とした「政治離れ」は進んでいる。11月

にはアメリカで中間選挙が行われる。そもそも中間選挙はレーガン政権以降、大統領の政党が議席を減らす傾向が強い。連邦議会議事堂に乱入した事件に関連し、内乱を扇動した罪で弾劾訴追されていたトランプ前米大統領は昨年末、弾劾裁判で無罪の評決を受けた。その復活が予想される。再びアメリカは『分断』されるのか。

この「選挙」が意味する「終わり」は「民主主義」である。そもそも「民主主義」とは選挙による「代表民主主義」のことなのか。昨年のテーマ「民主主義とは何か」ですでに哲学している。

二つ目のテーマが「中国」である。もう一か月を切ったが2月4日から20日まで2022年冬季オリンピックが北京で行われる。昨年の東京オリンピックと同じくコロナ禍での開催方式や隔離体制などは問題を積み残したままである。さらに中国でのウイグル族に対する「人権問題」、香港での自由弾圧に抗議する「外交ボイコット」が西側諸国から提案されている。昨年度のテーマで「オリンピックを取り上げたが、元来オリンピックと政治は親密な関係があり、また政権はそれを利用してきた。オリンピックの政治利用」と非難するのは非常に滑稽である。オリンピックは決してアマチュアリズムに基づく非政治的イベントではなく、商業的政治ショーそのものである。

このような政治状況の中にあり日本の

立場は微妙である。なぜなら本年は1972年9月共同声明、国交正常化50周年を迎えるからだ。しかし前政権が積み残した「国賓来日」課題も正式に撤回されたわけではない。安倍政権は外交での経済と軍事を完全に切り分けていた。どちらも極端な立場をとる故に許容されると信じていたのであろう。しかしこのような立場が今後も認められるのか。すでに軍事、経済ともに日本を上回っている中国に対して選択権はない。

さてその中国の内政での焦点は、今年の秋の中国共産党大会で習近平総書記が3期目に突入するのか、同時に毛沢東以来の共産党主席というポストを復活させるかが最大のテーマだ。過去に毛沢東による独裁政治が行われた反省から、共産党主席のポストは廃止され、合議制による集団指導体制に移行した。これを中国は自ら「中国的民主」と称している。そして、アメリカを意識し、ある国が民主的であるか否かは、その国の人々が判断すべきであり、外部の少数の者あるいは独善的な少数の国が判断すべきではないと言いつつ切っている。アメリカはこれに焦り「民主主義サミット」なるものを急遽開催した。しかし、そこでは民主主義に関する議論は一切行われず、敵味方を確認する形式的なものに終わった。

「民主主義」には様々な体制が存在するということはすでに去年のテーマで述べた。すなわち「専制的民主」独裁的民

主」が「全体主義」に繋がるという歴史の事実である。しかし、一方で民主主義はポピュリズム化し「衆愚政治」になり腐敗することも民主主義の発祥の地古代ギリシャより歴史は経験している。さらに「新自由主義」の問題が絡むと少数富裕層や特権階級による「政治の私物化」が行われるようになる。そもそも「新自由主義」の「自由」とは、あらゆる「コモン(共有物)」の私物化への好き勝手放題の自由である。

これが「民意」という「選挙」のもとに「正当、合法化」されている。

(3) 二つの「コモン」の転換と復権
さて、今月号では「コモン」という言葉が二回登場した。最初がパンデミック到来を示す「常識の終わり」での「コモン・センス」である。

この「コモン・センス」といえるは世界歴史教科書でのおなじみトマス・ペインの1776年発行された「コモンセンス」が有名である。トマスは不思議な人で、コルセット職人の息子として1737年イギリスで生まれたが、40歳になってアメリカに渡り様々な仕事をなす傍ら雑誌に寄稿、編集人になった。当時のアメリカ独立戦争の最中であつたが、独立派は劣勢であつた。しかし、彼のこの書が発行されるとたちまちベストセラーになり独立にむけた世論が熟成されていった。その内容は、当時のイギリスの政治体制

である君主制・貴族制という「常識」を批判し、独立によって自由を獲得すれば合衆国の繁栄は約束されるというものがある。また彼は、イギリスがアメリカを支配することは、小さな衛星が大きな惑星を支配するような不自然で不合理なことであるという、わかりやすい例でアメリカの独立が必然であることを説明した。このように「現在の常識は非常識」という「常識批判」によって「転換」を成し遂げたのである。『コモンの転換』が必要である。

そして、二つ目「共有物の私物化」の「共有物」としての「コモン」である。そもそも「近代・現代」のもっと以前、地球は誰のものでもなかった。人間というものが支配し始めたのが「人新生」という地球規模の地質年代区分を形成している。それ以前、地球の存在物はすべて「コモン(共有)」であった。歴史は直線的に進むのではない。つねにリセットをして繰り返す「循環」である。無限循環に終わりはしない。

古代東洋で考えられギリシア・ローマ、イスラム世界まで様々な宗教、哲学に影響を与えた「四元素」とは、この世界の物質は、空気・水・土・火の4つの元素から構成されるとする概念である。つまり、最低限の生命維持としての呼吸をするための「空気」、「水」。そして「住居」「生産手段」としての「土地」、それに「エネルギー」としての「火」は本来的に「コ

モン(共有物)」であった。しかし現在、反自然的な「資本主義」のもと、これらすべては「商品化」され「私物化」されている。さらに「地球上」だけでなく宇宙開発などによって「宇宙」も同様の運命を辿っているのである。普通の私たちは「お金」という労働による「交換価値物」でしかその一部を享受することはできない。元来「コモン」であったものが、この「コモン(共有物)」を取り戻さなければならぬ。これが『コモンの復権』である。

さて、新年号からいきなり書き出しが「終わり」から始まり、読者には最近のパンデミック再燃不安に追い打ちをかけたような気分させてしまった。しかし、本論でも説明したがこの「終わり」は「新しい始まり」を意味するものである。ここに希望を置きたい。しかし、課題は多い。根強く残る「常識」もその一つであろう。「偏見・差別」もこの「常識」の上にある。今回は「哲学する」部分は少なかったがこの「常識」も哲学分野の一つを形成している。ヒュームが提起した主観的観念論に対して、ある種の「思考原理」を疑えない「公理」として認め、それによって現象を説明しようという学派である。これはある意味では現代の自然科学の考えの基礎になっている。ある意味、自然科学も「常識」の積み重ねでもある。それ故に、基本が揺らぐと全体の揺れは増幅される。現代もコロナパン

デミックにより地盤が揺らされているのである。

大峯奥駈道(50)

下村 嘉明

駅前にある小さな葬儀場で婆さんの葬儀を行った。1時から30分ほどで式は終わり、車で5分ほどの所にある火葬場へ行く。待ち時間を利用して駅前の居酒屋で飲食した後、火葬場に行き骨を拾い自宅に持ち帰り、位牌と共に飾って住職にお経をあげてもらった。

一通り葬儀が終わり、それぞれが帰った後、家内と家内の妹と私だけになった。私は、余計なことを言わないように、出来るだけ彼女らの会話には加わらず、私の部屋で過ごすことにした。葬儀の時は、人の感情がデリケートに揺れるから、些細な一言が、後々迄尾を引くからだ。

葬儀の後には、遺産相続の問題が残る。大きな金額ではないが、それなりの資産がある。これをどう分けるかという問題だ。私が一言も触れられない問題だ。やこしい問題ではないが、爆弾の雰囲気醸し出す微妙な事柄である。

婆さんの葬儀が終わり、幾日かしたころから、夜見る夢が明るくなってきた。生死を彷徨っていた頃は、何かはつきり

とは記憶にないが、暗い感じの印象が残るものばかりだった。ところが、四十九日も過ぎたころから、夜中にトイレに起きた時や朝目覚めた時に、婆さんの存在が記憶のどこかに残っていて、誰かひとり、つまり婆さんが今も生きているような妙な感覚を持った。家内と二人だけなのに、婆さんが婆さんの部屋にいるように感じてしまうのである。

田舎の実母も父が亡くなって暫くは、父が生きとつてやと思えるとききりにこぼしていたが、家族を亡くした人は、同じような経験をするのかもしれない。老婆が独り田舎で暮らすのは、大変寂しいと言っていた。そんなときに、家の中に父が残したであろう匂いを感じると妙に安心するらしい。田舎の仏壇は大きく、毎日、線香やご飯を供える習慣があるが、あながち馬鹿にしたものではない。義理の母と言いながら、私は本当に実の母以上に介護を長年してきた。もし、家内が病気になるっても、婆さんのように介護が出来ないかもしれない。

在宅介護の難しさは、経験したことのある人でなければ、分からないが、昔の人は、当たり前のようにみんながしていた。嫁さんは無償で介護役を受けなければならなかった。当然のように介護をしなければいけなかった。介護はタダで女の人がやってくれるもの。という風習だけは今も残っているように思える。介護関係の職員の待遇改善が行われないのは

その証拠だ。医療と介護は同じ福祉関係であるが、医療は西洋からの輸入品であり、介護は日本古来からの影響が強い、まして女の人の仕事だと無理やりに押し付けられてきたから、タダでやって当たり前前の風土が長く続いたのだろう。

医療・福祉系の現場の職員に話を聞くと、絶望的な声が聞こえてくる。一番給与が高いのは医者、次は薬剤師、看護師、

…など序列があつて、最後は、患者のオムツ交換専門の叔母さんだという。私は、幾年前前に居酒屋でおむつ交換専門の女性3人と一緒になった事がある。年配の女性は、4年余りで一番のベテランさんで、他の人は仕事を始めて日が浅いようだった。彼女らの話を隣の席で聞きながら、私はえらいショックを受けた。最も大変な仕事をしている人が一番安い給与とは、何たることか。けしからんという憤りと彼女たちに対する感謝の気持ちが強くなってその店の飲み代を驕り、梯子したスナックの飲み代も出した。

私は、最後まで婆さんを介護して感じたのは、日本の在宅介護システムはようやく立ち上がってきた感じだ。家族の介護人にとっては有難いシステムが出来つつある。

田舎の同級生で幾人かの姑さんら在宅で看取ってきた彼女が言う「義母さんが亡くなって働きに出て楽しく働けるのは、あなたが懸命に介護をしてきたからだ。介護は本当に大変だ、やったもので

なければわからない。それをあなたは、非常に長い間やりとおしたんだから、どんな仕事にしても新鮮で楽しさが感じられるはずよ」と言ってくれた。介護の本質を理解した言葉である。すぐに警備員の仕事をハローワークで紹介してもらい、喜んで通っている根本的な原因かもしれない。

新型コロナウイルス禍愚考(その21)

明石 幸次郎

昨年12月に入りコロナ感染者数が激減しかかったら、新たな変異ウイルスのオミクロン株の感染者が見つかり、このウイルスは従来のデルタ変異ウイルスよりも感染しやすい可能性があるようで、再度の感染の拡大が懸念されています。

そんな中、昨年12月17日に大阪北新地で心療内科が入居する雑居ビルが61歳の男(元患者)によつて放火され、院長を含む25人も人が亡くなるという悲惨な事件が起きました。この惨事を起こした容疑者はその後、病院で死亡したので、事件の動機などの説明は出来なくなつてしまいました。

報道によると容疑者は、父親が钣金工場を営む4人兄弟の3番目の次男として

生まれ、親の工場を兄と一緒に手伝っていたようで、18歳か19歳の時に母親が亡くなり、それから、その合わなかつた父親の元を離れ、钣金工として働いて家族を設けて生活していたようで、2008年まで働いていた会社の社長は、腕の良い钣金職人で丁寧な仕事をして、仕事ぶりは信頼が出来たなどと言っていました。2008年にその会社を辞めた後に、20年間連れ添った伴侶と離婚しました。翌年に元妻に復縁を強く求めた

が断られ、孤独感を深め自殺を考えるようになったといわれ、その2年後の2011年に長男を包丁で負傷させる殺人未遂事件を起こし懲役4年の実刑をうけています。その判決では、離婚し、家族と離れて一人暮らしをするようになったが寂しさに耐えかねて復縁を申し込んだが断られ、そのため、さらに寂しさを募らせ、孤独感などから自殺を考えるようになったが、死ぬのが怖くて踏み切れず誰かを殺せば死ぬのではないかと思ひ立ち、元妻に迷惑をかけている長男を殺そう、家族は一緒になければならぬから元妻や次男も道連れにしようと思うようになったと認定しています。又、精神疾患から犯行を及んだとの弁護側の意見を退けて、家族に対する甘えの表れであり、被害者らの気持ちや犯行が周囲に及ぼす影響など全く考えず、ただ自分が死にたいというだけで何の落ち度もない被害者らを巻き添えにしよつと考えるのは身勝手

手きわまりないと厳しく断りました。今回の事件は、容疑者が過去に犯した事件と根っこが同じ動機であることは、誰でも想像が付きませんが、今度は家族と違い同じクリニックに通う自分と同じように精神的病で苦しんでいる見ず知らずの人達と患者から信頼されていた先生も巻き込んで死んでしまった事件です。

容疑者が以前に犯した罪により服役を終えて出所してから今回の犯行に至るまでの5、6年をどのように社会の中で何を考へて生きてきたか? 実兄は30年以上疎遠になっていたと言っていました。当然、元家族とも離れ、より孤独感と孤立感、自分が生きている価値そのものを否定するように自分を追い込んでしまったのであろう。

いのちの電話にも40代、50代で離婚したとか伴侶から離婚された男性から自殺したいという電話も多くあります。これらの男性に共通する苦しみ、悩みは、離婚により家族を失い、それにより誰のために生きているのか自分の存在感そのものを喪失してしまい、後悔と自責、他責(伴侶を責める)の念と一人になるという孤独感、孤立感に襲われ、自分が生きている意味を見い出せなくなる。その結果、精神的な病をより深めて、自死希求に陥つてしまったことです。

ある種の男にとつての離婚は人間の根源的な欲求と関わるものが失われるとも言われます。それは、自己を保存の欲求

と他者からの承認や愛情を求める欲求が失われるということです。これらが失われるとき、病的な自己目的化（自殺、犯罪、薬中、アル中など）や自己絶対視に陥って、出口のない自己追及に入り込むか、自己分裂を起こすしか自己を保つ術が無くなってしまう。

二つの生きるための基本的欲求が生活の中で満たされていけば、病的な異常心理に陥ることもないが、誰であれ、ずっと恵まれたときばかりではありません。

問題は、上手く満たされていない状況でどうするかであるが、重要なのは、自己目的化や自己絶対視といった閉鎖的思考回路に陥らないように気をつけることだと言われます。更に、大事なことは他者との相互的な関わりです。一時的に自分だけの閉鎖的思考回路に陥ったとしても

他者を介することで、そこから脱することも出来るので何でも相談出来る、安全基地のような人が身近にいることで、追いつめられるリスクは半分以下になるようになります。その意味でも普段から身近な人を大切にすると関わりが大事だと言えます。

身近にそういう人がいない、誰にも話を聞いて貰えないと追いつめられた人にとっては、「いのちの電話」は、一時的ではあれ苦しい胸の内を吐き出せる処であります。誰かに聞いて貰うことにより思い詰めた気持ちが楽になり、話すことにより、閉鎖的思考回路が少しは解けて、自分の違う思考に気付き、死ぬことを思

い止まる人もいます。それは、聴き手の聴く力によるかもしれないが、苦しい思いを受け止めて、掛け手に共感して寄り添える気持ちがないと、掛け手は聴き手の話し方、声のトーン、息使いで、自分の気持ちを受け止めてくれないと分かるものです。相談員はそれだけの覚悟と聴く力を経験によって付けていけないと務まりません。毎回、毎回が掛け手とのある意味のしんどい共同作業をしているようなものです。少しでも、今回の惨事を起こらないように、悩み、苦しむ人の役に立ち、抑止力になりえているのか自問自答を続けています。

オクラの山たより (64)

困了生

一

蕪村の俳諧に空想的な虚構による句が多いことはすでに述べました。なかでも実生活とはまったく関わりのない古典趣味、王朝趣味の句の多いことが蕪村の俳諧の特色の一面としてよくあげられます。たとえば次の句です。

① ゆく春や 同車の君の ささめごと

一七八〇(安永九)年

蕪村六十五歳の句です。彼の王朝趣味がいかんなく発揮されています。「同車の君」は貴族の牛車に同乗する女性。「ささめごと」はひそひそ話のこと。句の内容は「晩春の都大路を女性の同乗した牛車が静かに行く。牛車の中で身を寄せた美しい女性が尽きることなき睦言をささやき続けている」ということになるでしょう。暮れゆく春の情と車中のささめ言との照応がもしろい句です。こうした句は芭蕉にはまったく見られず蕪村の独壇場という趣すらあります。こうした王朝の情景や歴史を素材とした句を蕪村は好んで作りますが、いたずらに奇をてらうというわけでもなく、おぼろげな夢物語の世界や慕わしい人情味ある世界への希求がちらりちらりと顔をのぞかせています。以下、蕪村の王朝趣味の句をいくつか紹介していきます。

二

② 鬼老いて 河原の院の 月に泣く

年代未詳

③ 蚊帳の内に 朧月夜の 内侍かな

一七七七(安永六)年五月十日

④ 雛の燈(ひ)に 犬君(いぬき)

がたもと かかるなり

一七八三(天明三)年

⑤ さしぬきを 足でめぐ夜やおぼろ月

一七七九(安永八)年

⑥ 狩ぎぬの 袖の裏這ふ ほたる哉

一七六八(明和五)年五月六日

⑦ 春の夜や 宵あけぼのの 其の中に

一七七三(安永二)年二月二十七日

⑧ 女具して 内裏拝まん おぼろ月

一七七一(安永元)年

②から④までの句は「源氏物語」に関する句で、⑦の句は「枕草子」に関わった句です。このことに即座に気づいた人はかなりの古典通でしょう。

②の句は年老いた鬼が河原の院で月を見て泣いている光景を詠んだものです。

「河原の院」は嵯峨天皇の皇子源融の邸宅で数奇を極めた院でしたが、紫式部の

生きたころにはすっかり荒廃して彼女の同時代人藤原実資の日記「小右記」には「荆棘盈満、水石荒蕪(イバラの雑草が庭園いっぱい)に満ち満ちて、山水の景はすっかり荒れ果てた」と書かれているほどでした。この荒廃した河原の院で老いたる鬼と化した源融が廃屋の月を見上げて「恋しや恋しや」と昔を慕って忍び泣いているというのです。「源氏物語」

の「夕顔」の巻では光源氏が夜ひそかに夕顔を「なにがしの院」に連れ出して一夜をともし過ごすうちに鬼に取り殺された、という話が出て来ますが、蕪村がこの句を詠んだ時代には「なにがしの院」は「河原の院」という説は周知のこととされています。

蛇足ですが、故郷を棄てた蕪村が郷愁の思いに月を見て涙を流す姿は、この老鬼が廃屋で月を見て泣く姿と重なりと主張する蕪村研究者もいます。そうした点から考えると、この句は王朝趣味の句ととるだけではなく蕪村の心のうちをかいま見せた忘れがたい句ともいえます。

③の句は「源氏物語」の「花宴」に登場する右大臣の六の君、つまり朧月夜と光源氏の逢瀬をもとにした句です。句意は「蚊帳の内にいるのは朧月夜の内侍だね」というもの。蚊帳の内がおぼろで誰がいるのか分からないので朧月夜の内侍にたとえて呼びかけているのですが、呼びかけた相手が妻のともであつたかもしませんが、美化した戯れがおかしく楽しいです。

「源氏物語」の「花宴」では、光源氏は宴のあと、不義の恋、父桐壺帝の妻、源氏の継母でもある藤壺の辺りを徘徊するので、戸締まり厳重で入りこむことができず、たまたま忍び込んだ弘徽殿にいた光源氏の兄である東宮（後の朱雀

帝）のもとに入内する予定であつた右大臣の六の君（朧月夜）と関係を結ぶこととなります。この朧月夜との関係がもとで光源氏は須磨へと流れて行くこととなるのですが、その後も二人の関係は続きます。悪魔的な魅力を持った女性といえるでしょう。

「朧月夜の内侍」と妻に呼びかけたとしたら、妻に対してかなり「ヨイショ」した句なのかもしれません。こうした戯れの句にも「源氏物語」が持ち出される辺りが蕪村の王朝趣味といわれる所以なのでしょう。

④の句は高校の教科書にも出てくる「若紫」の一説です。光源氏が最も愛した女性である紫の上との出会いの場面です。

この時、紫の上はまだかわいらしい女の子でした。その様子を「顔つきはまことに愛くるしい感じで、眉の辺りはほんのりとけふるみたい。あどけなくかきあげている額の格好、髪を生えざまは実に可愛らしい」（口語訳は岩波の新日本古典文学大系による）と紫式部は書いています。この女の子が泣いている。理由はかわいがっていたスズメの子を伏せた籠の中に入れていたのに犬君といううっかり者の女童が伏せた籠を倒してスズメを逃がしたというのです。この話をもとに雛壇のぼんぼりをうっかり者の犬君のような女

の子が袂をひっかけて周囲が暗闇に包まれました、と蕪村は詠みました。あどけない少女のしぐさと雛祭の灯が王朝物語風な感じを作つておもしろい句です。

⑤の句は逢瀬の一夜の秘め事を前にした情景という解釈がよくされています。

「指貫」は古代から中世にかけて着用された男性用の袴。それを足で脱ぐという自堕落な動作がほの明るい朧月夜の中の情交を的確に表現して、読む人に前後のいきさつを十分に想像させます。「朧月夜」という言葉から光源氏と朧月夜との関係も連想され、読む人の想像はいよいよふくらんでいきます。

⑥の句は「源氏物語」の「螢」に関する句です。藤壺の兄である兵部卿宮と玉鬘を結ばれるようにと一計を案じて宮がやつてきたときに用意した多くの螢を玉鬘の顔の辺りや部屋の几帳に放ちます。功を奏したかどうかは物語を読んで欲しいのですが、平安時代の貴公子が着るのは薄物で袖の中に入れて螢の光は、その袖を透かして美しく明滅します。王朝物語の雰囲気背景に狩衣の裏で明滅する螢の青白い光。⑤の句とはまったく違う清雅といつてもよい世界を詠んでいます。

⑦の句は「枕草子」の「春はあけぼの、紫だちたる雲の……」からとった句です。

春の夜よ、お前は宵とあけぼのの中間にあつて中国の詩人にも日本の歌人にも見逃されているが、長くて静かな春の夜は一番魅力ある時間だ、という句意です。蘇軾の「春宵一刻値千金」という詩句もあるように春の宵とあけぼのは中国の詩人や清少納言の随筆によつて定評あるものですが、この句は春の夜に新しい美を見出しています。この句には

もろこしの詩客は一刻の宵をおしひ、
我朝の歌人はむらさきのあけぼのを賞せり
蕪村七部集のうちの「明鳥」

という前書きがつけられていて春の夜に新たな魅力を発見した蕪村の得意さが少し見えます。

三

⑧の「女具して 内裏拝まん おぼろ月」はおもしろい句です。句意は、女を連れて御所を拝みに行こう、夜空には春宵の悩ましくもなまめかしい朧月がかかっているけど、というもの。句意としてはこれだけなのですが、これからさまざまな解釈が出てきます。たとえば清水孝之氏の説。

現実には酒宴の席に侍る美妓を誘い出そうという酔興。それを「女を具して内裏望まん」と見事に王朝の幻想世界

に転化した。朧月夜のもとにけむる御所はまさに夢のような別世界である。

「新潮日本古典集成 与謝蕪村集」から

一読しただけでは理解しにくい説明ですが、遊里、例えば京都御所に近く蕪村もたびたび足を運んだ三本木などの遊里の巷に出没した蕪村が、たまたま美妓をうまうまと誘い出すのに成功して御所の前を取りかかったのでしょう。それを見事に王朝の幻想的世界である「源氏物語」の「花宴」の朧月夜（六の君）と源氏との恋物語にうまくはめこんだという趣向の句というわけです。もちろん、美妓を連れ出したのが俗悪な成金商人でもかまいません。清水説によれば傍目から見れば生々しく下品な風景を蕪村は魔術師のように優美な「源氏物語」の世界の出来事かのように造形したということになります。

こうした見方ももつとですが、実は蕪村に真筆自画賛「春月辞」があります。

この掛け軸の下部に従者を連れた直衣姿の貴人とすれ違ふ僧侶とおぼしき人物が描かれ、上部には次の賛文がしたためられています。

唐土（もろこし）、我が朝にも、秋の月を賞する名どころはあまた侍るに、なごて春月は等閑（なござり）に見過（し）にけむ。禁城の南門の辺りより仰ぎ

見れば、如意が嶽の少し南なる山のいただきより、如月（きさらぎ）十日あまりの月、ほのかに指し出で、柳おぼろに、梅のおぼつかなく香り来るなど、すべてやるかたなき心地せらるるに、何がしかの大臣（おとど）にやおはすらめ、内よりまかで給ふが、前もはらはでやをら行き過ぎ給ふなど、ことにやんごとなき。

女具して内裏拜まん朧月 夜半翁

中国でも我が国でも秋の月をめぐる名所は多いのにどうして春の月を軽んずるのか、と不満を述べた後、如意が岳の少し南から出た満月一步手前の月と周囲の風情が胸一杯になつてどうしようもないと自らの感動を述べています。そこへ何某という大臣らしい貴人が内裏より出て来られ、前ぶれの先駆けもなくおもむろに通り過ぎて行かれたことが格別に恐れ多いことである、と書いています。

この賛文からすると「女具して……」の句は蕪村が朧月の夜に京都御所の堺町御門の辺りで薄ぼんやり見える柳やほのかに匂う梅の香に酔いしれていた時に偶然出くわした貴人の姿に王朝時代の幻想へと想像がふくらんだということのようです。そうなれば「こんなに風情のある朧月夜の御所ならば、私もみやびな女性をともなつて内裏を拝みたいものだ」と

いう解釈が妥当のようです。ひよっとしたら蕪村は自らを光源氏に「女」を朧月夜の内侍（六の君）にまで想像力を広げていたのかもしれない。これはあくまでも筆者の妄想ですが。

ついでながら、この句について萩原朔太郎が「郷愁の詩人 与謝蕪村」でおもしろいことをいつているので紹介します。

「春宵怨」ともいふべき、こうしたエロチカル・センチメントを歌うことで、芭蕉はまったく無為であり、末流俳句は卑俗な厭味に低落している。ひとり蕪村がこの点で独歩であり、多くの優れた句を書いている、彼の気質が若々しく、枯淡や洒脱を本領とする一般俳人の中にあつて、範疇を逸する青春性を持つていたのと、かつ卑俗に墮さない精神のロマネスクとを品性に支持していたためである。

さすが近代日本屈指の詩人の指摘です。お見事というほかはありません。なお「春宵怨」とは春の宵の悩ましくもなまめかしい情感のことです。

四

蕪村には虚構の句が多くあることはすでに述べました。確かに想像力を駆使して王朝趣味、狐狸譚、芝居、怪異といつ

た趣向の句作をする例は他の俳人にも多くあります。蕪村もまた今まで見てきた王朝の情景を詠んだ句や、狐か人か鬼かという怪異を題材にした句、たとえば「公達に狐化けたり宵の春」や「雲の峰に肘する酒呑童子かな」といった句、そして既に述べた歴史を素材とした句も好んで作っています。しかし、それらの句にあつては奇をてらう、わざとらしい、ということとは少なく、そうした句には得ようとしてもなかなか得られぬ人間味への希求がかいまみられます。それは「昔のこととをしきりに思ひかえず」という郷愁と共通なものが蕪村にあるからでしょう。

遅き日の つもりて遠き 昔かな
春雨や 堤長うして 家遠し
いかのぼり 昨日の空の ありどころ

これらの蕪村の有名な句には茫洋とした彼方にある何ものかを求める雰囲気があります。この延長線上に蕪村の王朝趣味があつたといつたらいいすぎでありましようか。



隠された歴史(39)

満田 正賢

前回から日本書紀の記述に大きく影響している漢籍の話をしていきますが、この手の話は面白くないと感じられる方が多いと思います。しかし、日本書紀が引用した漢籍の見極めは、日本書紀研究にとって重要です。なぜならば、もし現在失われている漢籍の文章が日本書紀の中で多く使われているとなれば、日本書紀の編者(述作者)の漢籍による潤色の度合いが大きく塗り替えられるからです。そして、そのことによって、日本書紀の編者(述作者)が、日本に残る史料によって描いたと思われる箇所が変化するからです。

今回は、『藝文類聚』からの引用が最も鮮明に見られる磐井の乱の記述を例に挙げて具体的な話をしますので、少しは興味を持っていただけたらと思います。

磐井の乱は、継体天皇が近江毛野臣に六万に兵を与えて任那に派遣しようとした時に、筑紫君磐井が新羅と通じてそれを阻止しようとしたので、継体天皇が物部鹿火に命じて磐井を討伐したという事件です。古事記では「筑紫君石(磐井)、天皇の命に従わずして、多く礼無かりき。故物部の荒甲(鹿火)の大連、大伴の金村の連二人を遣わして、石井を殺したまひき」と簡単に記されています。「隠された歴史(12)」でもこの記事に

触れましたが、日本書紀が近江毛野臣の任那派遣に関連させて磐井の乱を描いているのは全くの作文であり、実際は継体による磐井の領土への侵略であろうということが、通説になっています。

日本書紀の磐井の乱の記事が作文であることを検証するために、『藝文類聚・武部』の中の各用例を引用したとされる日本書紀の文章の現代語訳、原文、引用文を列挙しました。Aが日本書紀の現代語訳(山田宗睦訳)、Bが日本書紀の原文、Cが『藝文類聚・武部』の中にある用例の原文です。記載したアルファベットは「上代日本文学と中国文学」の中で小島憲之氏が表記したもので『藝文類聚・武部』の中の用例の順番を表しています。

①A ああ、大連よ、磐井が従わぬ。汝が行って征(伐)せよ。
B 咨、大連、惟茲磐井弗率。汝徂征。
C (戦伐、尚書、f) 咨寅、惟茲有苗弗率。汝徂征。

日本書紀の原文は、用例の「萬」を「大連」に、「有苗」を「磐井」に置換えた文章になっています。

②A ああ、磐井は西戎の悪賢い奸物です。川が阻むのを頼みにして朝廷に仕えず、
B 嗟夫磐井西戎之奸猾、負川阻而不庭。
C (戦伐、魏楊脩出征賦、h) 嗟夫呉之小夷、負川阻而不庭、

*②、③、④の文章については、後でふれます。

③A 山が峻(たか)いのをあてにして、
B 憑山峻
C (戦伐、晋張戴平呉頌、j) 憑山阻水
④A 乱をおこしました。
B 而稱亂
C (戦伐、晋陸士龍南征賦、i) 敢行稱亂

⑤A 徳を敗(やぶ)り道に反っています。
人を侮り、おごって自分を賢としています。
B 敗徳反道、侮慢自賢
C (戦伐、尚書、f) 侮慢自賢、反道敗徳

日本書紀の原文は、用例の順番を変えた文章になっています。

⑥A 昔の道臣から今の室屋にいたるまで、帝を助けて(反する者を)罰しました。民を塗炭(火水)(の苦しみ)から救うのは、彼(時)も此(時)も一つです。ただ天の賛(たす)けをうけるのは、臣がつねに重んじるところです。

B 在昔道臣、爰及室屋、助帝而罰、極民塗炭、彼此一時、唯天所讚
C (戦伐、魏文帝於黎陽作詩、g) 在昔周武、爰及暨公旦、戴主而征、救民塗炭、彼此一時、唯天所讚

日本書紀の原文は、用例の「周武」を「道臣」に、「暨公旦」を「室屋」に、「戴主而征」を「助帝而罰」に変えて、その他の用例の文章についてはほとんどそのまま使っています。

⑦A 良將の軍というのは恩をほどこし、忠を推しすすめ、己を思うと同じように人を安んじる。河が切れたように攻め、風の発するように戦う。
B 良將之軍也、施恩推忠、怨己治人、攻如河決、戰如風發。
C (將帥、黄石公三略、a) 良將之軍也、怨己治人、推忠施恩、士力日新、戰如風發、攻如河決。

日本書紀の原文は、用例の「士力日新」を省いて、後は用例の順番を変えただけの文章になっています。

⑧A 大將は民の生殺を掌握している。国の存亡はここにある。つとめよ。
B 大將民之司命、社稷存亡、於是乎在、
C (將帥、抱朴子、d) 大將民之司命、社稷存亡、於是乎在、

日本書紀の原文は、用例をそのまま使用しています。

⑨A つつしんで、天罰を行なえ
B 勗哉、恭行天罰
C (戦伐、尚書、e) 惟恭行之天罰

日本書紀の原文は、用例の文章をわずかに変えて使用しています。

⑩A 天皇は親しく斧鉞をとって、大連に授けて・・・といった。
B 天皇親操斧鉞、授大連、曰
C (將帥、淮南子、b) 主親操鉞、授將軍曰

日本書紀の文章は、用例の「主親」を「天皇」に「鉞」を「斧鉞」に、「將軍」を「大

將軍」に「鉞」を「斧鉞」に、「將軍」を「大

連」に置換えた文章になっています。

⑩ A 長門以東は朕がとらう。筑紫以西は汝がとれ、もっぱら賞罰を行なえ。

B 長門以東朕制之、筑紫以西汝制之、専行賞罰、

C (将帥、漢書) 闌(ゲツ・しきみ・

城門のかんぬき) 以内寡人制之、闌以外将軍制之、軍攻爵賞、

日本書紀の原文は、用例の「闌以内」を「長門以東」に、「寡人」を「朕」に、「闌以外」を「筑紫以西」に、「将軍」を「汝」に、「軍攻爵賞」を「専行賞罰」に置換えた文章になっています。日本書紀の磐井の乱の記事の中で、①、⑤⑥⑩については、漢籍の用例を文章として引用していることが明白です。しかし、②、③、④、は本来、「負川阻而不庭、憑山峻而稱亂」「川が阻むのを頼みにして朝廷に仕えず、山が峻(たか)いのをあてにして乱をおこしました。」という対句になった文章です。③、④はその文章を構成する字句ですが、別の用例から、細かく分断された字句が取上げられています。

これまで日本書紀の磐井の乱の記事の大半が『藝文類聚・武部』の中にある用例を使って作文されているのを見てきました。同時に用例の文章は一部日本書紀の述作者によって、磐井の乱の史実(又は史実と思わせようとしているもの)に置換えられています。この置換えられた部分は磐井の乱の史実を探る上で重要だと思われまます。

最も注目されるのは、⑩の用例の「闌以内」を「長門以東」に、「闌以外」を「筑紫以西」に置換えている部分です。

この部分が史実であるとすると、筑紫君磐井の領土は長門以東にも及んでいたのであることがわかります。

次に注目されるのは、⑥の用例の「暨公旦」を「室屋」に置換えている部分です。「室屋」とは、允恭天皇から顕宗天皇まで五代の天皇に大連として仕えた「大伴室屋」のことです。大伴室屋は継体天皇を招聘した大伴金村の父と言われています。この場面は継体天皇と物部鹿火とのやりとりですから、ここにあって大伴氏の祖先を「道臣」として持ち上げる必要はありません。一方これが実際には大伴金村とのやりとりであったならばつじつまは合いません。古事記には物部鹿火と大伴金村の二名を派遣して磐井を殺したと記されていますので、古事記の方が真実を語っているように見えます。

さて、磐井の乱の記述で私が注目したのは②、③、④を合わせた「負川阻而不庭、憑山峻而稱亂」(川が阻むのを頼みにして朝廷に仕えず、山が峻(たか)いのをあてにして乱をおこしました。)という対句の漢文です。この漢文を日本書紀の述作者が創作したとすると、日本書紀の述作者は、漢籍から用例を借りて、少し順番を変えるなどして記事を作る、というレベルを超えて、立派な対句の漢

文を作る能力を持っていたことになりまます。又、「川と山によって防壁されているのを頼みとして反乱を起こした」という史実があつたことになりまます。

筑紫の君磐井の本拠地は、磐井の墓と想定されている岩戸山古墳のある場所から見ても、筑後平野の久留米近辺であることは間違いのないと思われまます。筑後平野を表現するのに「川と山によって防壁されているのを頼みとして」という表現はピンときません。又磐井の領土全体を表していると考えた場合でも、「海によって防壁されているのを頼みにして」という表現であれば史実に沿っていると考えられる事ができますが、そうではありません。

私は「負川阻而不庭、憑山峻而稱亂」という対句は漢籍の引用である可能性が強いと考えまます。前回私は、「日本書紀の述作者が座右に置いていたのは『藝文類聚』ではなく、『藝文類聚』の源流たる『華林遍略』であつた可能性が強いと考えています。」と述べました。その理由はこの「負川阻而不庭、憑山峻而稱亂」という対句にあります。『藝文類聚』百巻は、『華林遍略』六百二十巻の用例をほとんど踏襲していると言われています。そして『藝文類聚』の用例が短文であるのに対して、『華林遍略』は長文であつたと思われれる証拠(『華林遍略』からの引用文)が見つかつています。

磐井の乱の記述が引用した漢籍(類書)

の考察は、『華林遍略』が日本書紀述作者の座右に置かれていた可能性を探る端緒になるように思ひまます。

マルクスから学ぶ(一一)

成瀬 和之

今回は貨幣についてです。

AさんはBさんが好きだ。でもBさんはCさんが好きだ。こういうことはよくあることです。相思相愛ではないこういう場合を「三角関係」と言ひまます。市場においても同様のことが起こりまます。本を作つたAさんは服が欲しいが、服を作つたBさんはテーブルが欲しいというような場合です。

愛を取り持つキューピットが必要になります。例えば誰もが欲しいがる商品、例えば米を「仲立ち役」にしまます。本を作つたAさんも、服を作つたBさんも、テーブルを作つたCさんも、まず米と交換してから、次に米と自分の欲しい商品とを交換すれば、スムーズに商品交換ができるようになります。この「仲立ち役」が貨幣です。

ところが、米や牛が貨幣だとすると、重たかつたり、腐つたり、死んでしまつたりして困つたことになりまます。そこで、銀や金が貨幣の役割を担うようになりま

した。金や銀は、錆びにくいし、少量でも高価で、均等分割もしやすく、価値尺度、交換手段としての貨幣に適しています。今は欲しい商品がない場合も、貴金屬なら蓄えておくこともできます。こうして貨幣が登場してきました。

そして、この便利な貨幣を誰もが欲しがるようになります。「地獄の沙汰も金次第」「金は天下の回り物」などの諺まで現れます。「物神崇拜」がさらに進んで「拝金主義」まで現れます。「商品と商品との関係」が、さらに逆転して「貨幣と貨幣の関係」で世の中が回っているように見えます。「逆立ち経済」がさらに「逆立ち」するのです。

金の亡者も現れます。D・H・ロレンスの小説で、金貨をじゃんじゃん生み出す木馬を手に入れた男が、木馬にまたがったまま狂い死ぬという小説を読んだ記憶があります。

大阪の「維新」が「経済戦略」の目玉に「カジノ付きの万博」を目論んでいるのも、かなりこの寓話に近いのではないのでしょうか？ コロナ禍でカジノの計画がずれ込み、大阪万博後の開業しか目指せなくなりましたが。

今日の株式投資のもこの寓話に近いことはないでしょうか？「ニーサ」とかいふ小口株式投資のしくみを作って、株式投資で儲けたお金の税率を下げ、一般庶民まで「株主」、会社のオーナー気分にしていきました。さらには、その延長線上

に「日本株式会社のオーナー」気分にな権者を導いて行くことにつながります。

「存在と意識のずれ」です。

米国の投資家ウォーレン・バフェットが、次のように述べています。

過去二〇年間、階級闘争が続い

たが、勝利したのはわれわれの階級だ。われわれの階級が（われわれに対する）税率を劇的に引き下げたのだ。」（二〇一一年九月三日付、米紙ワシントンポスト）

これは一〇年前の記事ですから、投資家階級は「わが階級の勝利」に酔いしれてから、もう三〇年以上になります。一方、「直間比率の是正」とか言って、庶民に重い税負担を強いる消費税が上げられ続けてきたのです。そうす。これは新自由主義の登場の後のことです。

ところで、最近、MMT（現代貨幣理論）が、マスコミでも話題になっています。MMTは米国の経済学者などが主張しているもので、「政府が借金（国債）をいくら増やしても、それを中央銀行が引き受ければ問題はない」という考え方です。本当でしょうか？

MMTはドイツではほとんど報道されず、イギリスでも批判的に扱われています。なぜなのでしょう？

また、キャッシュレス化の進展に対して堤未果さんが『デジタル・ファシズム』（NHK出版親書、二〇二二年八月）で「マネーが狙われる」と警鐘を乱打して

います。

貨幣にかかわるこれらの最近の動向については、分量が増えるので次回に考えることにします。今日のファシズムを考える場合、とりわけ『デジタル・ファシズム』は必読です。

俳句

土田 裕

今年こそコロナ無き世へ初明り
終の地と決めし山河の初明り
気負わねば昨日の続き年新た
初活けの主役は庭の実南天
咲くほどに身を寄せるごと福寿草

俳句

影山 武司

日の丸の白のまふしき大旦
枝々の先まで満つる淑気かな
さくら色の紙より覗く祝箸
土間奥に白の反され注連飾
一椀を仏前に置く雑煮かな
キャラメル箱のサイコロ絵双六
追羽子の青き空打つ音高し
子の服にくるみ釦の縫初め
さ緑に匂ひ立ちたる七日粥
藍の糸かがり亀甲手鞠かな

【13ページからの続きです】

母の名は親仁の腕にしなびて居
くどかれてあたりをみるは承知なり
なきなきもよい方をとるかたみわけ
はだかでといへば娘はをかしがり
もてぬやつかんらんらとうちわらひ

しかし、柄井川柳の死後、古川柳は地口や言葉の洒落を重んじる狂句に席巻される。古川柳に帰ろうという狂句への批判が川柳家の井上剣花坊や阪井久良伎によって始まるのは明治も末期、古川柳から狂句への流れが、柄井川柳の名にちなみ「川柳」の名称で復権したのは明治三十年代である。その後、今日に至る川柳の基盤を築いた「六大家」の時代が始まる。六大家と呼ばれる柳人は、何を掲げどんな句を詠んだか、次回に覗いてみようと思ふ。

編集後記

SK生

朝から酒が飲めると喜んだ正月が過ぎると新型コロナがまたふり返ってきた。引きこもり生活の再来である。冬眠だと嘆く人もいようが読書には充分な時間ができた。昔、途中で断念した本を手にも取ることが最近多い。哲学書は一寸手強いが長めの小説ならまだ読破可能だ。この冬、人間のありようについての学びを深めてみようか。心に栄養を補給するためにも。

ふみの道草 (43) 山椒魚

人生としての川柳 (続)

『人生としての川柳』は、実は、木津川計の書の題名である(角川学芸出版、二〇一〇年)。氏は、昭和四十三年に自ら創刊した『上方芸能』の編集長を長く務めた。この雑誌は、能・狂言・歌舞伎・文楽・舞踊・落語・漫才と、京阪神の芸能と大阪文化を広く紹介・論評する専門誌であった。『人生としての川柳』は、川柳の総合誌『川柳マガジン』(新葉館出版)に二〇〇一年九月号から二〇一〇年一月まで八年四か月、同名で百回にわたり連載された稿の半分を一書にしたものであるという。氏は、大阪を拠点とする川柳界の雄とも言うべき番傘川柳本社の社友であるが、この書は、川柳に親しみを持たない人にとっても生きるうえで示唆に富む書であると思う。さて、川柳は何を詠むのであろうか。氏は言う。

人生とは何か、を僕はすべて川柳から学んだ。人間とは何か、もまた。人の世の森羅、その万象を解き明かして川柳は尽きることがない。では、川柳は何を詠むのか。

①川柳は万人の願いを描く。今川乱魚の句。

天下を論じ国家を論じ金が欲し

繕い繕わざる『金色夜叉』ばりの地上である。

②川柳は男女の愛を教える。松田ていこの句。

黒髪の手先まで耳となつて待つ

③川柳は嘆きを代弁する。泉正太郎の句。

この広い世界にボクの職がない

「人の世や嗚呼に始まる広辞苑」(橋高薫風)の真実だ。

④川柳は人間の暗部をさらす。古川柳に。

なきなきもよい方をとるかたみわけ

潔白でない人がいようか。だから詩人・杉山平一は「潔白」でこう詠む。

ズボンのハンカチーフ
わがうちなる唯一の潔白
昨日洗ったばかり

けさアイロンをかけたばかり
もうこの汚点

⑤川柳は負の心情を詠む。高橋散二の句。

貸す金はないがきつねとつてくれ

涙が出るではないか。また、岩谷政子の句。

出世した仲間の話で座が沈み

⑥川柳は人情の機微をうがつ。とし子の句。

アルバムに貼れない人と逢つてい
る

また、満州生の句のつらい真実。

中継ぎも打たれ先発ほつとする

⑦川柳は批判精神の短型詩である。国家精神総動員は、暗色ではなく明色で来る。渡辺隆夫の句。

カラフルに国家が来ますピヒッピ
ヒッ

⑧川柳は時代をとらえる。

お宮お葛浪子明治は泣く女

白眉とも言うべき岸本水府の句。あの十五年戦争を矢部あき子は詠んだ。

昔むかし赤紙という人さらい

⑨川柳は人生とは何かを教える。あらかじめ設定され、約束されないから人はみな希望を胸に生きるのである。細井辰二の句。

台本のない人生がすばらしい

⑩川柳は美しい情感のうたである。愛しいひと、美しい自然を川柳は称えた。山本義明の句。

君の名を叫ぼう美しい朝だ

俳人で評論家の坪内念典は、「俳句は言いたいことが言えない文芸、川柳は一番言いたいことを言う文芸」と区別したが、引用した句はまこと川柳である。また、イギリスのバーナード・ショウは、「私の冗談は真実を語ることで」と言ったそう。そう言えば、加藤周一にも「真面目な冗談」という書があった。人は、人間などそのひとかけらに過ぎない森羅万象の真実に触れたとき笑う。だから川柳は詠う。次は、高橋散二と岩井三窓の句。

誰よりも君を愛して使い込み

出世しよつていやらしい声となり

さて、川柳は古川柳から始まる。古川柳とは「江戸文学の一部であつて、宝暦から寛政に至る三十余年間に、柄井川柳の選抜によつて残された、約八万の十七字詩を中心とする古典文学である」(山路閑古、『古川柳』、岩波新書、一九六五年)。古川柳は、人間観察の秀句、可笑しみの傑作の宝庫だ。

【以下、続きは12ページ下段にあります】